

## 〈ça faire P que Q〉について

安達博明

### 0. はじめに

「事柄 Q の生起」と「その後期間 P が経過したこと」を関係付けるために、フランス語では 〈il y a P que Q〉や 〈voilà P que Q〉と並んで、〈ça faire P que Q〉<sup>(1)</sup> も使用される。

- (1) Ça fait vingt ans qu'on donne de l'argent aux grands patrons pour embaucher, et ils n'embauchent pas. *LM*24/3/98

この構文が含んでいる 〈ça faire P〉は、金額などの合計を P として提示するときに使用される表現でもある。〈ça faire P que Q〉における P、つまり (1) における "vingt ans" も「合計」という操作により算出されたものと考えることができるだろうか。本稿では、そのように考えることが妥当であるかどうかを検討した上で、〈ça faire P que Q〉とは何をどのように伝える表現であるかを、用例の調査、インフォーマントが提供する情報と作例をとおして論じる。コーパスは主に *Le Monde* sur CD-ROM 97-98 を使用した<sup>(2)</sup>。

### 1. 〈ça faire P que Q〉の P

(2) は買い物の場面で、支払いをする側が、購入しようとする品々に対して全部でいくら払わなければならないかを店員に尋ねるときに使用する表現である。

## (2) En tout, ça fait combien ?

このように、〈ça faire P〉は、「合計」という操作が要求される場面で使用される。(2)において〈ça faire P〉が果たしている機能は図1のように示される。

図1

$$\boxed{A} + \boxed{B} + \boxed{C} + \dots \rightarrow \boxed{P}$$

次に、〈ça faire P que Q〉を説明する場合についても図1が適用可能であるかどうかを検討してみよう。

(3) Ça fait quatre ans que je suis en prison, que j'ai tout ça dans mon ventre. LM7/5/98

(3) では "an" が合計の対象となっていると考えることが可能であるので、(3)において発話者が〈ça faire P que Q〉を使用する動機も、(2)と同じように、「合計」という操作の必要性を感じているからだと説明できそうである。ところが、同じ論理で(4)は説明できない。

(4) J'apprends le français depuis 5 mois. Ah, je l'ai appris pendant 3 mois il y a 2 ans. ? Ça fait huit mois que je l'apprends.

(3) では、Pは断絶のない連続した期間である。そこで、明らかにPが連続した期間ではないことが伝わるような文脈で〈ça faire P que Q〉を使用した(4)をインフォーマントに提示したところ、文の容認度が下がった。単に「合計」という操作が必要なだけであれば、Pが連続した期間であることは関与的ではないはずである。したがって、(4)の不適格さも説明できる別の原理が必要となる。

また、次の(5)、(6)も「合計」という概念では説明が困難な例である。

(5) Ça faisait un bout de temps qu'on ne vous voyait plus, monsieur Desnos, s'exclama le barman, qu'est-ce qu'on vous sert ? LM14/8/98

(6) Lui, l'ancien journaliste à L'Humanité-Dimanche, aujourd'hui au chômage, dit que ça fait belle lurette qu'il a enterré l'idée de révolution, qu'il "s'en fout" totalement, car ce n'est pas la "bonne manière de poser

les problèmes". *LM28/1/98*

(3) では, "an" は計数的な性質を持つために「合計」という概念となじむが, (5), (6) のように非計数的な性質を表す名詞句が P として使用された場合, P は何かが合計された結果であるとは考えにくい.

そこで以下では, 「合計」という概念による (3) の説明を棄却した上で, (3)-(6) を同時に説明する 〈ça faire P que Q〉の機能とはどのようなものであるかを提案する.

## 2. que 節中で描かれる事柄 Q の分類

この章では 〈ça faire P que Q〉における事柄 Q を性質に応じて分類した上で, この構文が使用される環境を確認する.

(7) *Faut arrêter ! c'est toujours nous qui prenons, ça fait des années que ça dure. Ils nous font monter la haine, ils veulent nous faire voter Le Pen.*

*LM9/10/98*

(8) *Cela fait onze ans que je suis ici... Je vis toujours dans la même maison avec quinze autres filles qui se sont toutes retrouvées là dans des circonstances identiques aux miennes.* *LM5/12/98*

事柄 Q を叙述する動詞句が, (7) における「継続」や, (8) における「状態」といった, ある種の持続を表わす事行のタイプに属する場合, 事柄 Q は生起後期間 P にわたって持続する. この事柄 Q の性質を type 1 と呼ぶこととし, 持続を太線で表わすことで, その性質を次のように図示する. X は事柄 Q の生起時点, Y は期間 P を算定するのに必要な時点とする.

図 2 (type 1)



(9) *Cela fait déjà bien longtemps que la radiologie est devenue une activité*

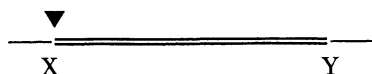
à part dans l'exercice médical contemporain, estime Jérôme Cahuzac, député (Parti socialiste) de Lot-et-Garonne, rapporteur de la loi de financement de la Sécurité sociale. *LM* 5/8/98

- (10) A l'entrée de la "Maison des sociétés", comme on nomme encore ici, à Arras, la Bourse du travail, Didier Bargade a déroulé sa chaussette, qu'il continue à tricoter en écoutant du Johnny. Ça fait quatre ans qu'il a commencé ; la chaussette mesure à présent 80 mètres de long.

*LM* 14/1/98

事柄 Q を叙述する動詞句が (9), (10) のように瞬間的に成立する事行のタイプに属する場合, 事柄 Q そのものは動詞句の性質上, 生起後持続することはないが, その後別の事柄 (Q と呼ぶことにする) が期間 P にわたって持続している。例えば, (9) では「変化したこと」が事柄 Q であり, 変化後の状態が事柄 Q' である。(10) では, 「始めたこと」が事柄 Q であり, 先行文脈で明示されている *il continue à tricoter en écoutant du Johnny* が事柄 Q' である。この事柄 Q の性質を type 2 と呼ぶこととし, 事柄 Q' の持続を 2 重線で表わすことで, その性質を次のように図示する。

図 3 (type 2)



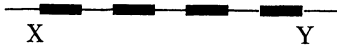
- (11) "Cela fait trente et un ans que je fume", raconte Ben en roulant de fins pétards odorants. *LM* 28/11/98

- (12) Quand je parle d'intégration aux jeunes médiateurs, ils me disent : "Ça fait longtemps qu'on met des frites dans le couscous." Ils ne se sentent pas du tout les représentants d'une communauté. *LM* 12/4/97

(11) では, 事柄 Q を叙述するために用いられている動詞句は持続を表わす事行のタイプに属するが, (7) や (8) に見られるような, 期間 P における絶え間ない持続ではなく, 断続的な持続を描写している。また (12) では, 事柄 Q

を叙述するために用いられている動詞句は瞬間的に成立する事行のタイプに属するが、(9) や (10) に見られるような、1 回きりの出来事ではなく、繰り返される出来事を描写している。つまり (11), (12) は習慣を表わしている。この事柄 Q の性質を type 3 と呼ぶこととし、「断続的な持続」、あるいは「繰り返される出来事」を太線で表わすことで、その性質を次のように図示する。

図 4 (type 3)



以上、事柄 Q を性質に応じて 3 つに分類したわけであるが、図 2 から図 4 をととして分かることは、区間 X-Y において持続する事柄が 1 つ存在するということである。それは、(7), (8), (11), (12) のように、事柄 Q として直接表現される場合もあれば、(9), (10) のように事柄 Q をととして間接的に表現される場合もある。

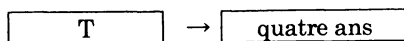
### 3. 〈ça faire P que Q〉の機能

前章では、事柄 Q の分類をととして、区間 X-Y において持続する事柄が 1 つ存在するということを確認した。ところで、「持続する事柄が存在する」とき、その持続に付随する「ある時間量」が必ず存在する。ここでいう「ある時間量」とは、「an», «mois», «semaine» のような語でとらえ直された時の量ではなく、単に経過した時の量を指している。

すなわち、〈ça faire P que Q〉の表現の対象となるのは、Q をととして直接的あるいは間接的に言及される「持続する 1 つの事柄」と、それに伴う「ある時間量」(以下 T と呼ぶ) である。では、「合計」という概念を棄却した上で、T と P とはどのような関係にあると考えればよいだろうか。まず (3) を考えてみよう。この場合、発話者は事柄 Q の存在を踏まえ、Q について T を認め、「an」という単位を用いて T を P として提示していると考えられる。この過程のうち

T の認識以降を示したのが図 5 である。

図 5

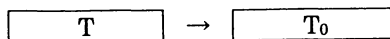


(P として提示)

「合計」という概念では不適格さが説明できなかった (4) も、図 5 にしたがうと説明できる。つまり、T とは「持続する 1 つの事柄」に伴う「ある時間量」というものであった。ところが、(4) では、持続する事柄が 2 つであるために、T を 1 つと認定することができなくなり、容認度が低下したと考えられる。

では、図 5 にしたがうことで、(5)、(6) にはどのような説明が与えられるだろうか。これらの例の場合、発話者は T を性格付けていると考えられる。性格付けを受けた後の T を  $T_0$  とすると、この過程は図 6 のようになる。

図 6



ところで、図 5 や図 6 で示される過程には、発話者の主観が大きく関与していると考えられる。例えば、“an” という単位を導入すれば “Z ans” と表現できるような T を考えてみよう。この場合、発話者が T を “Z ans” と表現する必然性はない。それは、(13)、(14) のように P を概数として提示している例から明らかである。

(13) "Cela fait une vingtaine d'années que le personnel bénéficie déjà d'horaires aménagés et individualisés", souligne le DRH. *LM* 17/9/98

(14) Cela fait près de dix ans que le pilote ne réside plus dans son pays, lui préférant les douceurs climatiques et fiscales de la principauté de Monaco. *LM* 3/11/98

T に対する性格付けについても同様で、ある人物が T を “longtemps” と性格付けたとしても、別の人物にとっては “longtemps” は不適切であるかもしれない。換言すると、T をどのように表現するかは発話者によって異なるということになる。したがって、〈ça faire P que Q〉は発話者が T を評価する表現

であると言える。

では、〈ça faire P que Q〉は (2) のように使用可能な 〈ça faire P〉を含んでいるにもかかわらず、なぜ「合計」という概念では説明できない例が存在するのであろうか。それは、〈ça faire P que Q〉が表現の対象とする「時間」というものが不連続な存在ではないからである。時間を "an", "mois", "semaine" といった語で表現することは可能であるが、これらの語は、連続した性格を持つ「時間」というものを発話者が必要なだけ切り取って扱うために存在しているのであって、「時間」がある単位のもとで分割された状態で存在しているということ裏付けるものではない。つまり、〈ça faire P que Q〉において、P は合計の結果ではない。

#### 4. depuis との比較

「事柄 Q の生起」と「その後期間 P が経過した」ことを関係付ける手段として、〈ça faire P que Q〉の他に 〈Q depuis P〉も使用される。

(15) La tension sociale est vive en Martinique alors que la grève des ouvriers de la banane dure depuis près d'un mois. LM15/12/98

(16) Monique Le Merrer, militante socialiste, est l'un des piliers de ce mouvement, qui dure depuis le 14 mars. LM31/10/98

(15) は幅のある期間を表わす名詞句が depuis に後続する場合、(16) は時点を表わす名詞句が depuis に後続する場合である。では、〈ça faire P que Q〉と 〈Q depuis P〉の間にはどのような相違点が認められるだろうか。

(17) Le Pakistan voisin, qui s'est déjà militairement affronté *par trois fois depuis cinquante ans* avec l'Inde, a aussitôt réagi en affirmant qu'il se "réservait le droit de prendre les mesures appropriées" pour garantir sa sécurité. LM13/5/98

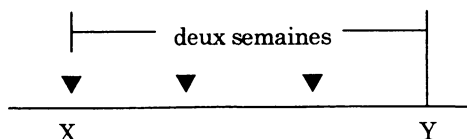
(17) の斜字体の箇所が示すように、〈Q depuis P〉は期間 P において、事柄

Q が生じた回数を表わす表現と共起可能であるのに対して、〈ça faire P que Q〉はそのような表現とは共起できない。

(18) \*Ça fait deux semaines que j'ai vu Paul avec une fille trois fois.

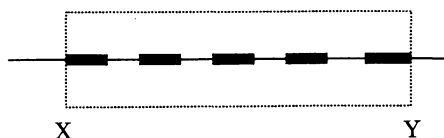
回数を明示する表現を挿入してしまうと、「ポールがある女性と一緒にいるところを目撃する」という事柄の時間軸上における点在を表すことになってしまい、「期間 P にわたってある事柄が持続していること」にはならない (図 7)。

図 7



(11), (12) においても事柄 Q は確かに時間軸上で点在しているが、ではなぜ (11), (12) が容認可能であるかという点、点在する出来事はまとめてとらえられており、あたかもひとつの事柄が持続しているかのように解釈されている (図 8)。ひとつひとつの出来事は独立性を失っているのである。

図 8



したがって、〈ça faire P que Q〉と〈Q depuis P〉の間の相違点を次のようにまとめることができる。

〈ça faire P que Q〉

- ・期間 P における事柄 Q の点在は表せない。

〈Q depuis P〉

- ・期間 P における事柄 Q の点在を表すことができる。



## 5. おわりに

本稿では、合計という操作が要求されるときに使用される〈ça faire P〉を含んでいることにとらわれず、〈ça faire P〉に沿って〈ça faire P que Q〉の機能を規定することを棄却し、〈ça faire P que Q〉にのみ適用できる説明原理を提案した。それは、「〈ça faire P que Q〉は、事柄 Q あるいは事柄 Q' の持続に付随するある時間量 T を、発話者の主観によって評価する」というものであった。また、〈ça faire P que Q〉と〈Q depuis P〉の間の相違点についても言及した。

ところで、入手した例を観察すると、faire の時制は単純時制か、または迂言法を用いた近接未来形であった。また faire が否定されている例は見当たらなかった<sup>③</sup>。このことから、〈ça faire P que Q〉は「faire は否定できない」や「faire は複合時制で表示できない」といった制約を持つと考えられる。さらに、〈ça faire P que Q〉の機能は〈il y a P que Q〉や〈voilà P que Q〉とも異なるはずである。これらについては今後の課題としたい。

注.

1. 本稿ではこの構文における cela と ça の区別は行わない。以下この構文に言及するときは ça のみを表記する。
2. 刊行年月日を記した用例は Le Monde sur CD-ROM 97-98 によるものであり、記していないものは作例である。また、用例中の斜字体は筆者による。
3. インフォーマントによると、même を挿入するのであれば、ne...pas による否定は問題ないとのことである。

Ça ne fait même pas deux ans qu'il apprend le japonais.

## 参考文献

柏野健次 (1999): 『テンスとアスペクトの語法』, 開拓社。

古石篤子 (1984) : 「DEPUIS «déictique»の分析」, 『フランス語学研究』, 第 18 号.

—— (1986) : 「«Depuis» を含む現在形否定文の問題 — 「DEPUIS «déictique»の分析」追記—」, 『フランス語学研究』, 第 20 号.

松村瑞子 (1996) : 『日英語の時制と相 —意味・語用論的観点から—』, 開文社出版.

Le Goffic, P. (1993) : *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.

Charaudeau, P. (1992) : *Grammaire du sens et de l'expression*, Hachette.

Vendler, Z. (1967) : “Verbs and Times” , *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, pp. 97-121.

Corpus : Le Monde sur CD-ROM 97-98

(博士課程後期課程)